

終章

平成 30 (2018) 年度は駒沢女子大学開学から 25 年目となる節目の年であり、開学以来発展してきた人文学部を新たに人間総合学群として生まれ変わらせる再スタートの一年でもあった。また、前年平成 29 (2017) 年度は駒沢学園として創立 90 周年となる記念の年でもあった。

再スタート 1 年目は、人間総合学群は 1 年次生のみ、人文学部は 2 年次生以上という状態であり、今後は、学年進行につれて教員の所属も変わり、授業科目には旧カリキュラムと新カリキュラムが同時進行するという過渡期的な混乱が生じることが予想される。また、看護学部は設置 1 年目であり、完成年度まで毎年が新しい挑戦という状態が続く。

本報告書をまとめる過程においては未確定であったため、報告書内では一切言及していないが、平成 31 (2019) 年度入試も前年度に引き続き定員を確保できる見通しとなった。したがって平成 31 (2019) 年度においては 1 年次・2 年次が定員超過の状態となる。

大学全体の学生定員は変わらないものの、これほどの組織の改革があると、教職員ともにオーバーワークの状態はしばらく続くであろう。

もともと、定員回復への機運が高まったことは歓迎すべきことである。人間総合学群への転換等が功を奏したというべきだが、大規模校の大学定員厳格化の余波を受けた部分も大きいものと思われる。近年の定員不充足の背景にある少子化による 18 歳人口の低下の問題は依然継続しており、本学も生き残りをかけて第 2 第 3 の矢を準備しなくてはならない。

その際、まず心がけるべきは、学内の全教職員が高等教育機関としての本学の役割、そしてディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを改めて確認しつつ、どのような人材を育成し、そのためにどのような方針をもって教育していくのかを明確に意識しつつ学生に向き合うことであろう。大学の評価は大学の教育によって測られるべきである。

そのためにも「内部質保証」の理念を全教職員が共有し、確固とした根拠に基づく点検・評価とその結果を受けての改善・向上がますます重要となる。そこで、本学ではアセスメント・ポリシー策定を行い、平成 30 (2018) 年度末に公表に至った。

今回、大学内部での自己点検・評価作業はいったん終了するが、平成 31 (2019) 年度に第三者の視点からの検証を受ける過程で、新たな問題点も浮き彫りとなり、さらなる改善・向上が求められることも出てくるであろう。駒沢女子大学が女子高等教育機関として、より充実した教育を展開していく上で有益なご意見をいただけることを期待し、結びの言葉としたい。

平成 31 (2019) 年 4 月 19 日
駒沢女子大学自己点検評価委員会